東釧路遺跡・北斗遺跡出土の石製装身具

石川　朗[*1]・水ノ江和同[*2]・大坪　志子[*3]

はじめに

小稿の目的は、東釧路遺跡と北斗遺跡から出土した３点の石製装身具について実測や詳細な観察を通し再検討することである。作業は水ノ江、大坪両氏が行い、後段でまとめられている。ここでは遺跡や遺物に関して二、三補足する。

「東釧路遺跡」は当初、３つの地点を総称する名称として用いられていた。遺跡は釧路川河口部から約3.5㎞上流、同左岸の釧路段丘上に位置する。

第Ⅱ地点は、第Ⅰ地点（東釧路貝塚）と小谷を隔てた東側の尾根状地形に立地し、標高は10～12mである。近年、遺物の再整理を進めており、出土総数は8,172点が数えられた。このうち土器は5,529点あり、縄文早期に分類されるものが81％（4,880点）を占める。石製装身具は紹介する２点のみの出土である。

北斗遺跡は釧路湿原西縁に位置し、遺跡範囲は東西2.5㎞、南北0.5㎞に及ぶ。1973年に行われた第１地点の調査で土坑墓から石製装身具が副葬品として出土している。副葬品には身部が切り出しナイフ様をなす大形の石匙（北斗型石小刀）などが含まれており、この時期の組み合わせをよく示している。

なお、北斗の装身具は「ヒスイ製（？）」と報告されているが、肉眼観察や質感による限り少なくとも「硬玉（jade）」ではない。

１．東釧路遺跡第Ⅱ地点出土環状石製装身具

出土情報

東釧路遺跡第Ⅱ地点からは、縄文早期後半の石刃鏃文化に伴うと考えられる環状石製装身具（これまで「環飾」「環石」と報告され、また、一般的には「環状石製品」と呼称されるが、ここでは小稿の題名に準じて「環状石製装身具」とした。）が２点出土している。

1968年に刊行された『釧路市東釧路遺跡発掘調査概要』（釧路市教育委員会、以下「概要」という。）及び1980年に刊行された「釧路市東釧路遺跡第Ⅱ地点の発掘調査－昭和41年－」（『釧路市立郷土博物館紀要』７、以下「紀要」という。）によれば、1966年７月15日から８月30日まで実施された東釧路遺跡第Ⅰ地点の第３次調査の最中に、第Ⅰ地点の東約200mで石刃鏃が採集されたことからそこを第Ⅱ地点とし、８月16日から23日まで予備調査が行われた。第Ⅱ地点は、緑ヶ岡地区区画整理事業の一環として道路建設や宅地造成が行われ、遺跡が湮滅の危機に晒されていたことから、予備調査の成果を踏まえ翌1967年７月15日から20日と、８月３日から30日まで第１次の発掘調査が実施された。

「概要」によれば、「蛇紋岩製の環飾」が浦幌式に伴って出土したことが報じられているが、点数の記述はない。「紀要」では、浦幌式のうち条痕文土器に伴って「全面が磨かれている。濃緑色の蛇紋岩製。３片に破損していた」という「環石」１点が実測図と共に紹介されている。この環状石製装身具は小稿の図１－１に相当し、「Hi-LocⅡ２の１T.No115 1966.8.17」と注記されている。1966年の予備調査に際して出土したものであるが、詳細な出土状況については特に記載はない。

小稿の図１－２については、「Hi-２-A-７ No５ 1967.7.9」と注記されており、1967年の第１次調査で出土したものと考えられるが、「概要」にも「紀要」にも、実測図を含めてこの環状石製装身具が出土したことを示す記載はまったくないため、出土状況を含め詳細は不明である。なお、注記の「A-７」は「概要」によれば調査区の中央部に設定されたグリッドを指している。日付は７月９日であるが、この日はまだ発掘調査が始まる７月15日の前であることから、事前に採集されていた可能性もあるが、おそらくは日付について注記ミスがあったと考えられる。

層位については、「概要」と「紀要」で内容に多少相違があるが、「紀要」によれば、Ⅳ層上部に「石

＊１釧路市埋蔵文化財調査センター　＊２文化庁記念物課　＊３熊本大学埋蔵文化財調査センター

刃鏃文化期の遺物」が集中し、Ⅳ層下部及びⅤ層から沼尻式土器が、さらに下層から「テンネル式類似の特殊な土器が若干出土」している。層位的な状況や環状石製品は浦幌式土器に伴うという記述から、Ⅳ層上部は浦幌式土器が主体的に包含された層であり環状石製装身具もこの層に包含されていたと考えられる。

なお、東釧路遺跡のうち縄文前期を中心とする貝塚部分（第Ⅰ地点）は、道東を代表する大規模貝塚として1970年に国の史跡に指定されている。

環状石製装身具について

環状石製装身具１（図１－１、Hi-LocⅡ　２の１T.No115 1966.8.17）

この環状石製装身具の外形は縦3.5cm、横3.8cm、厚さ0.7cm、孔は縦1.8cm、横1.9cm。側面から見ると隅丸台形のような形態で、図の右側の面のほうが平坦である。したがって、この平坦な面が装身具として人の身体に接地する面と考えられ、実測図でも裏面という認識でセッティングした。

全面に丁寧な研磨が施されるが、独特な光沢と滑らかな表面から、恐らく動物の皮のようなもので仕上げられている。孔の側面のうち、図の上部で少し細くなる部分には削痕が明瞭に残るが、これは紐擦れではなく、仕上げの研磨が不十分であったために、製作時の成形痕が残っているものと考えられる。仮に、この環状石製装身具をアクセサリーとして使用することを想定して孔に紐を通したところ、やや細く直線的な部分が紐との接地部分、つまり、上部になったため、それに準じてこの細い部分を上にして実測図を作成した。

環状石製装身具２（図１－２、Hi－２－A－７No５ 1967.7.9）

この環状石製装身具の外形は縦4.1cm、横4.6cm、厚さは0.9～1.4cm、孔は縦1.6cm、横1.7cm。側面から見るとやや隅丸台形のような形態で、図の右側の面のほうが平坦である。したがって、図１－１の場合と同様の理由でこの面を裏面としてセッティングした。

また、図の下側はかなり太くなるため、孔に紐を通すとやはりこの部分が下になったため、これに準じてこの太い部分を下にして実測図を作成した。図の左側の左上と下部には欠損部があるが、これらの欠損部ではいずれも、欠損後にこの中ま

写真１　東釧路遺跡出土環状石製品

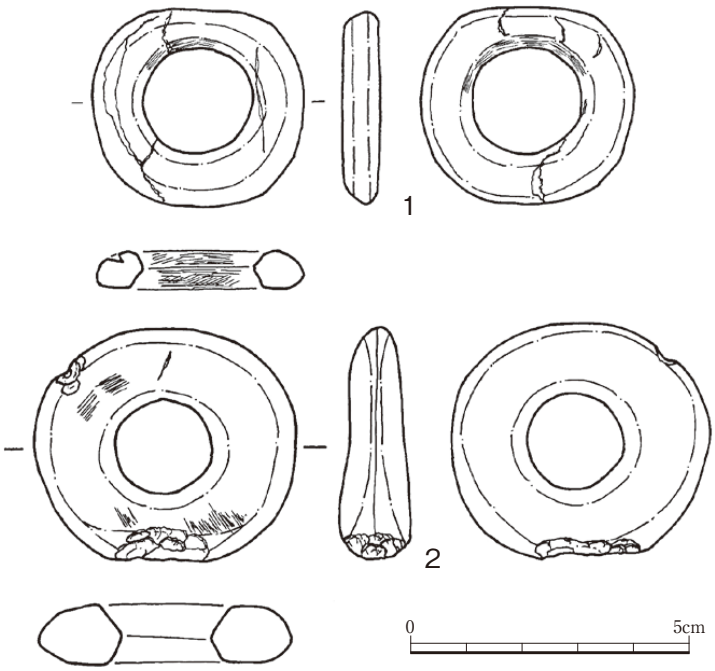

図１　東釧路遺跡出土環状石製品

で丁寧に磨かれている。

石刃鏃文化の環状石製装身具

1956年、吉崎昌一が道東で出土する石刃鏃と極東ロシア（アムール川下流域・サハリン）の石刃鏃との関係性を初めて指摘したが、それからあまり時間を経ずして、1963年には加藤晋平が石刃鏃に環状石製装身具が伴うことを確認した。その結果、石刃鏃や女満別式土器とともに、環状石製装身具は極東ロシアとの関係性を示す資料として早くから注目されてきた。しかし、その後は出土事例があまり増えなかったため、環状石製装身具が石刃鏃文化の研究において注目されることはほとんどなく、ようやく1998年に畑宏明・北沢実・寺崎康史が、2004年に高倉純が石刃鏃文化に伴う石製装身具を集成するなかで再認識された次第である。高倉によると、当該期の石製装身具は環状だけではなく、垂飾状や小玉状のものもあり、大きくは環状を含めて３種類からなる。ただし、類例がそれほど多いわけではなく、また、厳密な意味でヴァリエイションが多いことからも、細かい類型化は難しいのが現状である。

環状石製装身具については、完全な正円形はなく、一部が細くなるのが一般的で、この部分に紐を掛けアクセサリー的に使用したと考えられる。また、人の身体との接地面のことを考慮するなら、平坦な面がいわゆる裏面になるとも考えられる。

浦幌町の共栄Ｂ遺跡から出土した石製装身具は、玦状耳飾との説もあり、玦状耳飾の系譜論において注目されている。しかし、筆者も大貫静夫（2003）と同様に、当該資料は玦状耳飾ではなく環状石製装身具が欠損した後に、欠損部を研磨した資料と考えている。このことは、小稿で紹介した図１-２の欠損部のそれと類似していることからも妥当な見解と言うことができよう。

【参考文献】

大貫静夫　2003「日本と大陸の交流」『東アジアと日本の考古学Ⅲ－交流と交易－』同成社　３-28頁
加藤晋平　1963「石刃鏃について」『物質文化』１　物質文化研究会　３-18頁
畑宏明　北沢実　寺崎康史　1998「日本国北海道地域における旧石器時代及び縄文時代前半の玉類」『東亜玉器』２　香港中文大学中国考古芸術研究中心　322-329頁
高倉純　2004「石刃鏃石器群に伴う飾玉」『季刊考古学』89　雄山閣　63-64頁
吉崎昌一　1956「日本におけるBlade industry」『西郊文化』14　西郊文化研究会　13-17頁

写真２　北斗遺跡出土石製装身具

２．北斗遺跡第１地点第４号墳出土石製装身具

出土情報

北斗遺跡第１地点第２発掘区第４号墳からは、欠損した後に再加工されているが、人形（ひとがた）状の石製装身具が１点出土している。

北斗遺跡群は、釧路市の中心部から北西７Kmに位置する釧路湿原に近接した標高20m程度の釧路段丘上にあり、円形や方形の竪穴群９群により構成される。この遺跡群は、昭和27年頃の土砂採取工事による遺物の露出や数度の踏査によって、その重要性が認識されるにいたった。その後、開発による破壊の懸念が高まり、1972年と1973年に遺跡の地形測量および部分的な発掘調査が行われ、合計338基の竪穴群が把握されたことにより（1975　釧路市教育委員会）、1977年には国の史跡に指定された。

小稿で紹介する石製装身具は、北斗遺跡第１地点第２発掘区第４号墳から副葬品として出土した。第４号墳は、長軸は北北西－南南東方向になり、規模は1.9×1.4mの楕円形である。墓坑の底面では、頭骨の輪郭とわずかな歯が確認された。共伴する遺物（副葬品）は、縦型の石匙２点と磨製石斧１点である。墓坑の時期は、縄文前期前半の綱文式期と報告されている。

石製装身具について

特徴　石製装身具は、後述するように、本来は人形状を呈していたと考えられ、小稿では便宜的に各部分を図２のように頭部・胴部・脚部と呼称する。また、アクセサリーとして使用する場合、縦断面の反り具合から、わずかに内湾する側が表面と、その反対の外反する側が裏面と考えられる。サイズは、全長9.5㎝、脚部先端の幅1.9㎝、最大厚0.96㎝である。頭部上端は上から見るとあたかも二枚貝が開いたような形状である。裏面の頭頂端には、小さな刻みが１つある。胴部と脚部の境には、一条の横位の沈線が刻まれるが、それは表面と両側面にかけてであり全周はしない。このことはこの面が表面であることを示すもう一つの特徴と言えよう。胴部中央に直径0.6㎝の孔が表裏両面から穿孔されており、孔の上部には紐ズレがある。また、胴部の両側面からも穿孔されているが、これについては上部が破損して完全な孔には

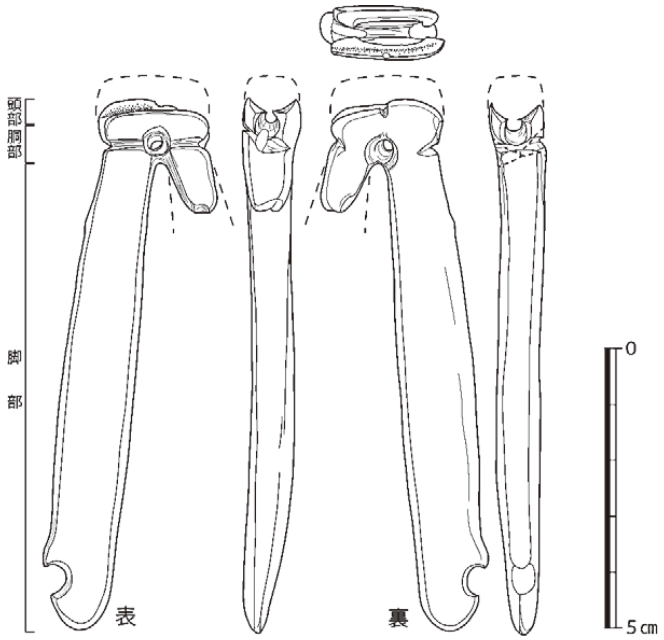

図２　北斗遺跡出土石製装身具

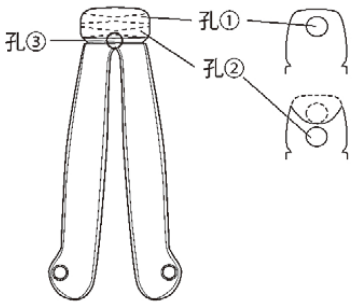

図３　石製装身具復元模式図

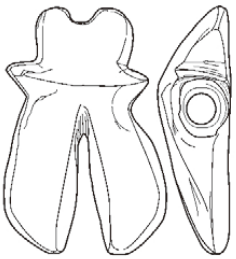

図４　真脇遺跡出土石製品

なっていない。長く伸びる脚部の一端には、半円形の抉りがある。本来この抉りは、円形の孔であったものが使用途中で破損して現在のような半円形になったと考えられる。その理由は、現在の半円形が回転穿孔によると考えられるほど精緻で整った半円形であることによる。ただし、当初からこのような形状になることを目指して、意図的に製作されたとの想定も捨てきれない。

復元　本石製装身具の復元を試みたい。復元案は図３のようになる。まず、頭部上端は先述のようにあたかも二枚貝が開いたような形状（写真２右）であるが、これは紐による垂下用として当初両側面から穿孔した孔①で、紐ズレなどにより上部が破損したと推察される。この下にも、両側面から穿孔がなされており、この孔②も紐ズレなどにより上端が破損したと考えられる。すなわち、孔①で紐を通して使用（垂下）し、やがて上端が破損して、アクセサリーとして紐を通すことができなくなったために孔②を穿孔して改めて紐を通して使用（垂下）したが、それもまた紐ズレなどで破損して、現在のような形状になったのであろう。以上のことから、この石製装身具は本来、このように横方向の孔に紐を通して垂下していたと考えられる。しかしその後、今度は孔②も破損してしまい、やむなく胴部の表裏両面から３番目の孔③を穿孔したようである。このことは、孔③の位置が不自然なほど脚部の付け根に接している位置関係からも推察される。

二枚貝が開いたようにみえる頭部の縦断面は、図３のとおりバランスのとれた半円形であり、実際に観察すると凹凸はなく面的に整って独特な光沢を有する。ただし、この半円形から得られる復元径では、孔①の径はやや大きくなり過ぎ、破損前の頭部はかなり不自然に膨らみ違和感がある。そこで、筆者がこれまで観察してきた日本列島各地の縄文時代石製装身具の破損・再加工・玉ズレに関する所見によれば（大坪2015）、この半円形の形状とその表面の光沢は、玉ズレによって生じるそれらに酷似している。すなわち、紐ズレなどによって上部が破損したのちに、もう一つ管玉状の装身具を組み合わせ、それとの接触により孔①が広がった可能性が考えられるのである。なお、組み合わせた装身具は出土していないが、石製以外に骨製や鹿角製の有機質の装身具であったとも想定される。

脚部は、上記の本来の垂下状態を考慮すれば、バランス上、本来２本で左右対称であったと考えられる。一方の脚部が破損した後に非常に丁寧な研磨が施され、現状では破損の痕跡を観察することはできない。

参考事例

ここでは、地域や時期は異なり系統性は存在しないが、本石製装身具の本来の形状を考える場合に参考となる事例を紹介しておきたい。

石川県能登町に所在する真脇遺跡の第４次調査時に、縄文後期～晩期の層から類似する形態の石製装身具が出土している（図４）。頭部には北斗遺跡例の刻みを連想させる凹み（抉り）があり、胴部には両側面から穿孔された孔がある。脚部は北斗遺跡例のように細長くはないが、２本の脚部がある。また、片面の横断面が蒲鉾状に膨らみ、もう片面は平坦になることから、膨らんだ面が表面、平坦な面が裏面となり、北斗遺跡の事例と同様に表裏が明確に意識されている。以上のように、この真脇遺跡の事例の特徴を踏まえ、筆者は北斗遺跡の石製装身具の復元案を作成した次第である。

北斗遺跡と真脇遺跡の事例は、地域と時期は異なるが共通のイメージで製作された可能性も伺え、今後、類例が増加することを期待したい。

【参考文献】

釧路市教育委員会　1975『釧路市北斗遺跡調査概要』
能登町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団　2002『真脇遺跡2002』
蘇陽町教育員会　1988「付　玉目遺跡採集の石製装飾品」『高畑赤立遺跡発掘調査報告書』
大坪志子　2015『縄文玉文化の研究－九州ブランドから縄文文化の多様性を探る－』雄山閣